KARIBIB の回想

2023 年度１次隊/数学教育/渡辺 崇人
2025 年8月 28 日　Vol. 36

《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《《【後編】》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》

前回の Vol.35 に引き続き、 AFRICA ART PROJECT in NAMIBIA で行った取り組み２つを紹介します。

１． プロジェクト “Play your sound, your rhythm”

写真１：音を鳴らしている所　　写真２：音のイメージを描画する様子

これは、日本を中心に海外でも音楽とアートを融合した情操教育活動を展開する ONZO（オンゾー）というグループが企画したプロジェクトで、カプセルに自分の大切な物を入れて音を鳴らし（写真１）、その音から連想されたイメージをカプセルに描く（写真２）という表現活動の一つです。性別や国籍、障害の有無を越えて、個々の人間に元来備わっているリズムや音感を引き出し、造形的な表現に繋げることがこの活動のねらいです。最初は“音”を “絵” にするという抽象的な取り組みだったため、作業が難航するだろうと予想していました。しかし、いざ始めてみると日本の生徒ならどこかこっ恥ずかしそうにする音を鳴らす撮影にも皆ノリノリで臨み、その後の描画作業では色を多用しながらカラフルに思い思いの絵を描いていました。その上、もっと驚いたことがその集中力です。いつもの数学や IC の授業では集中が途切れてしまう生徒も、今までに見たことがないくらい目を輝かせながら取り組んでいたことには驚きを隠せませんでした。え、なんでその集中力を数学で発揮してくれないの(。 ´・ω・)??と思いつつ、自分の授業について深く反省した瞬間でした。

2.　サンドアート of Dr. Sam Nujoma

写真３：作業前の説明時

下準備した合板に、砂を使って色付けしていきます。まずは各クラスに簡単に作業時の注意点やルールについて説明しました（写真３）。ルールは至って単純で、

① パレット上の“のり”を筆で板に塗ること。その際、書かれている枠線を越えないようにすること。
② “のり”の上に砂を落とし、指で軽く押し固めること。
③ 隣同士で同じ色にならないようにすること。
④ 順番に全員が体験すること。

です。特に③の配色は四色定理※1のようで面白かったです。

こちらも、“普段の授業では見せない”集中力を発揮してよく聞いていましたね（普段の授業はどうなってるの…）。そして、写真４が実際の作業風景です。ただ当日を迎えるまでは、こちらも上手くいくか一抹の不安はありました。というのも、何を仕掛けても興味をもたない生徒が一定数いること、授業中に脱走や喧嘩をすることが少なくないこと、また頻繁に警察沙汰になること等、授業以前の問題が山積していたからです。しかしいざ取り組んでみるとそれらも杞憂に終わり、写真の通り皆が夢中で作業していました。体験した生徒の事後アンケートでは

- 授業の時間が短すぎる。もっとやりたかった。
- 楽しかった。他の美術の授業も受けてみたい。
- こういった活動のように、もっと外部の人とコラボした取り組みをやって欲しい。

等、好意的な意見が目立ちました。

写真４：作業中の様子

時間の都合上、全クラスに割り振ることはできませんでしたが、割り振られていないクラスの生徒からも「私たちのクラスはいつやるの？私は勉強は苦手だけど、物作りは家でもやっているから得意なの。ほら、見てこれ。綺麗なブレスレットでしょ？先生、買う？」（あくまで売るんかい…笑）といった感じでリクエストが殺到していました。

写真５：持ち込みの絵

また、石田さんの絵の上手さに惚れ込み、弟子入りしたいと絵を持ち込んできた生徒が複数名いました（写真５）。しかもその多くが男子生徒で、彼らは普段は大人しいのですが、絵のことになると目を輝かせながら「どうか

※1．隣接する領域が異なる色になるように塗り分ける場合、“どのような地図”でも四色あれば足りるという数学の定理。1852 年に提起されて以来、長い間数学者を悩ませてきたが、その 124 年後に２人の数学者がコンピュータを使って証明した。

彼から絵を教わりたい。」と何度もお願いしてくる様は、普段の様子からは想像できませんでした。このような、こちらが未だ知らなかった本人たちの興味がある分野を発見できたことも収穫でした。

写真６：作業に来てくれた同僚

さらに最も驚いたことが、普段は多忙なあまりこういった活動には顔を出さない同僚数名が、隙間時間に顔を出して手伝ってくれたことです（写真６）。

写真７：校長の奥様と

その上、北部在住の校長の奥様が活動の噂を聞きつけて、わざわざ学校まで足を運んでくださいました（写真７）。完成途中でしたが作品を見るなり「本当に綺麗な作品だわ。完成後はどうするの？それと、もしよかったらなんだけど、私の肖像画も描いてもらうことはできるのかしら？本当にこの絵が気に入ったの！」と別のリクエストまで。同僚たちもそこに便乗して「私の分も、お願い～❤️」と次から次にキマってる写真を送って来る始末。。。絵に無限の可能性を感じた瞬間でした。

さて話は少し遡りますが、数名の同僚に情操教育（美術や音楽、体育といった授業）に関するインタビューを実施しており、

Q. 現在、ウチの学校では情操教育が放置されているという現状があるけども、どう思う？
A. 私たちも本当はそれら科目の授業をしたいの。ただ大学で教員免許を取る過程で、それらに関する教え方を習ったことがないから“何を”“どう”教えればいいか分からないし、アイデアもないの。だからもし知識があれば教えてみたいし、機会があれば習ってみたいわ。しかも、この問題はウチの学校に限らず、ナミビアのほんの一部の学校を除いたほぼ全土で起こってると思うわ。

という風に、現状を改善できないことへの胸中を教えてもらっていました。今回の取り組みは、その抜本的な解決までには当然至りません。ただ、作業を少し手伝うだけでも、作品を綺麗だと思ってくれるだけでも、今まで視野になかった情操教育にほんの少し目を向けてくれたという意味では、歩幅は小さいかもしれませんが課題解決に向けて一歩進んだのではないかと思います。

写真８：完成した作品と

そして、完成した作品が写真８になります。授業後も少しだけ時間をとってしまったため残っていた人たちとの撮影になりましたが、完成して本当によかったです。右の写真は放課後に同僚たちが“何番まであるんだ(´・ω･)??”と思うような、永遠に終わらない歌をず～っと歌っているところです。ただ、当初は複雑な心境でもありました。というのも「顔を出さなかった人もいるけど、なんで一緒に歌っているんだ？？」と、苦労はこちらが背負ったけれど、手柄は喜ぶのかという負の感情が若干あったからです。

しかし『こうやって自分事のように喜んでくれてよかった！これは日本人にはあまりない感覚かもね。』という石田さんの言葉を受けてハッとしました。「確かに日本人は自分が関わっていないことに感情を露わにすることが少ないから“手柄だけとって”という気持ちになりがちだけど、それを『自分事のように喜んでくれている』という見方もできるのか(゜д゜)！」と気付いたからです。これには目から鱗でした。それからは、嬉しそうにしてくれて御の字だ、やっぱりやってよかったなと心から思えました。

写真９：作品の玄関への取り付け

さて作品のその後です。同僚たちには『皆で作った物だから、できれば学校に置いて欲しい』と伝えた所、校長が快諾してくださり、用務員と生徒がすぐに正面玄関に取り付けてくれました（写真９）。日本で担任をしていた頃に生徒と文化祭で作った“爪楊枝（つまようじ）アート”が今も校舎の正面玄関に飾られていることを当時の制作時の苦労と共に思い出し、少し懐かしくなりました。

取り付けられた作品（写真 10）は、自身が帰国してからもまだ残っているようでホッとしました（笑）。

また、カリビブは小さい町なので噂がすぐにまわり、Town Council（町議会）が、同僚が作品を抱えている写真を Facebook に上げてくれました。

写真 10：取り付けられた作品

今回、これらアート活動を行ってまず間違いなく言えることが、自分一人では決してできなかったということです。そもそもこういった発想にすらたどり着けませんでした。それを一週間という限られた時間の中でここまでもって来られたのは、ひとえに石田さんをはじめとする協力者の力添えがあってこそです。配属先を代表して御礼申し上げます。

また、Vol.35 に載せた“アートの視点で国際協力ができるのか”という疑念ですが、ここまででお分かりの通り見事に覆されました。確かに情操教育は、理数科目と比較して生活や科学の発展に直結しづらい分、優先度が下がってしまうと思います。しかし、生徒の目や取り組む様を間近で見て、主要科目が苦手でも何か夢中になれるものがあることは、その子の未来を形作る大きな要因になり得ることを身をもって体感できました。これからは、知識が疎いなりにも同僚と共に情操教育に関してできることをやってみようと思った、生涯忘れることのない取り組みでした。

AFRICAN SAFARI　Vol.8

今回は、ナミビアの外で出会った海の生物二種類を紹介します。

《イルカ》

写真は有名なバンドウイルカで、初めて野生のイルカと泳ぎ、興奮しました。ただ、最高で時速 35km を出すため必死に追いかけても近づくことすらままなりませんでした…。人間の３～７歳程度の認知能力に匹敵するほどの知能をもつ頭のいい生物の代表格で、とある研究によると個体ごとに異なる音を出し、口笛のようなもので仲間を呼び合うそう。また、これは有名な話ですが脳の左右半分ずつを交互に休ませることができるため「泳ぎながら寝る動物」との異名をもつ、私が地上で最も大好きな生物です。

《ウミガメ》

有名なアオウミガメです。草食で、人間に危害を加えることはありませんが、水中でも色を見分けられるはずなのに何かと間違えられて尻を噛まれました。歯はありませんがとても痛かったです。シマウマと同じく、背甲の模様は個体ごとに異なり、また 50 年以上生きるものもいます。

次回：これまでの２年間の活動を振り返ります。